

O1-029

学齢期小児の2000年度基準値を基にした
2001～2017年度の体格変化に関する検討杉浦 令子¹、村田 光範²¹和洋女子大学 生活科学系²和洋女子大学 保健センター

【目的】

日本人小児の体格評価に関する基準値である学校保健統計調査報告の2000年度値を基準として2001～2017年度の値を比較し、学齢期小児の体格推移について検討した。

【性別・年齢別身長平均値】

2000年度身長平均値を0とした身長平均値の差は、男女とも全年齢において2000年度と比べ2001～2017年度まで有意差は認められなかった。2000年度値と比較すると、2017年度までに身長平均値は増減を示し、最大で男子0.6cm、女子0.4cmの減少傾向を示したが、この0.4～0.6cmの差だけで“現代の学齢期小児の身長は2000年度に比べ低くなっている”と判断することはできない。この程度の差は、身長測定誤差の範囲内である。基準値の2000年度値と比べ、その年度の全年齢で0.5cm以上の差を secular trend として確認できない限り、学齢期小児の身長が低くなっているとは言えず、身長の2000年度基準値を変更する必要はないと考えている。

【性別・年齢別体重平均値】

2000年度体重平均値を0とした体重平均値の差は、男女ともに2000年度値と比較して、9～15歳頃にかけて体重平均値が有意に減少傾向を示したが、16～17歳時点ではほとんど変わりがなかった。そこで、2000年度横断的体重平均値を基準とした2001～2017年度の各準縦断的体重平均値の年次推移を検討した。その結果、男子9～14歳、女子9～15歳で有意差が認められた。しかし、男子6～8、15～17歳、女子6～8、16～17歳で有意差は認められなかった。さらに、2001～2017年度の各準縦断的体重平均値を3つの年齢区分に分け2000年度横断的体重平均値を0として比較したところ、6歳や17歳は2000年度横断的体重平均値と各準縦断的体重平均値はほぼ変化していないのに対し、9～15歳の思春期年齢の体重は減少傾向を示した。2000年度以降、思春期年齢においては何らかの理由で体重が大きく変動している。しかし、15～16歳を過ぎると2000年度基準値に戻る傾向が示された。この現象が生じる背景についてはさらに検討する必要がある。

【結語】

2000年度以降の学齢期小児の年齢別身長平均値には有意差がない。一方、9～14、15歳の体重平均値が減少傾向を示し、やせ体型になっているが、男女ともに15、16歳以降になると体重平均値は2000年度値とほぼ同じになっている。2000年度以降の学齢期小児の年齢別体重平均値の動きについてはさらなる検討が必要であるが、今後とも学齢期小児の体格基準値を変更する必要はないと考えている。

O1-030

顎顔面頭蓋の成長発育評価に関する検討
一顎変形症患者の小児期での早期発見に向けて(2)一

小田 博雄

神奈川歯科大学歯学部 口腔統合医療学講座 歯科矯正学

【目的】

第46、52、53、61回の本学会において、重度骨格性下顎前突症を伴う顎変形症患者の思春期での顎顔面の成長について、前思春期から後思春期までをかえりみた。そこで本学会では、頭蓋の成長、特に頭蓋冠および頭蓋底について形態学的に追究した。

【対象および方法】

対象は、神奈川歯科大学附属病院矯正科へ前思春期に来院した骨格性下顎前突者女子5名、平均年齢は7.0±1.0歳で、顎整形力を含む矯正治療により思春期前期に前歯部被蓋の改善がなされたものの、その後来院せず、後思春期に顎変形症患者として外科的矯正治療が必要となった患者である。資料は、初診時から治療およびその経過観察期間中に撮影された正面および側面頭部X線規格写真である。通法により頭部X線規格写真上で透写図を作成し、頭蓋各部について距離的計測を行った。各個体における頭蓋各部の成長量については、各計測項目毎に、顎顔面頭蓋のパースェンタイル標準成長発育評価図表(日本矯正歯科学会雑誌56(1):44-51,1997)からパースェンタイル値を求め、パースェンタイルによる頭蓋の成長発育評価法を用い、絶対的発育評価ばかりでなく、一個体内における顎顔面頭蓋各部の成長発育の相対的発育評価も行った。さらに、頭蓋長幅示指数(頭蓋最大幅x100/頭蓋最大長)を用い形態学的に検討した。

【結果および考察】

1) 前思春期において、頭蓋長および前頭蓋底長には著しい個体差が認められた。2) 前思春期において、頭蓋冠は本対象患者5名の平均頭蓋長幅示指数は89.4 ± 6.4と超短頭に近い過短頭型であった。3) 内3名は頭蓋幅75p以上、頭蓋長が40p以下で、頭蓋長幅示指数も90以上と「超短頭型」を示していた。4) 前思春期に認められた頭蓋各部の前方および側方成長様相については、思春期を通じて、正常咬合者と同様な標準的な成長傾向が継続されていた。すなわち、パースェンタイル標準成長曲線の1-2channel内を経年的にほぼ辿っていた。

以上のように、全身状態に異常を認めない顎変形症の思春期における顎顔面頭蓋の成長の特徴が形態学的に明らかになったことから、遅くとも前思春期には、矯正歯科治療による顎変形症発症予防のための早期診断ができる可能性が示唆された。